フン・糞・フン！

動物応用科学科 3 年　木村　碧

「糞」。それは、とても貴重な存在だと思う。ここ約半年の間、サル・シカ・カモシカ・タヌキ・クマ・鳥・テンと多くの糞を見てきた。そして、糞をすれば種子散布の役割を果たし、落ちているだけで動物がここを通ったという痕跡になり、糞の内容物を調べれば食性についても分かってしまうし、また、糞があればそれを主食にする虫が現れる。このように、糞でその動物の色々な事が分かるとともに、糞に関わっている植物や虫など他の生き物についても視野が広がり、糞は大切な存在価値があると思った。

しかし、糞によって感動を得るだけでなく、糞によって苦難を抱えることもある。それは、「糞を見分ける」ことである。どの動物がどんな糞をするか知っておく必要があり、他の動物と区別ができないと、目的の糞を採取することもできなくなってしまう。そのために糞の特徴を覚え、勘を働かせ、糞採集に行く。そして、目的の糞を見つけたときの喜び、目的の糞ではない糞を見つけたときの落胆やショックを味わうのは結構楽しい。

そんな経験をした自分にある日、驚きの話を耳にした。それはなんと「隕石」と「人間の糞」の区別ができないときがあるという話である。南極では、隕石を採集し基地に持ち帰り、調べるという仕事がある。その採集のとき、隕石と凍った人間の糞が時に区別しにくい事があるらしい。そしてそのような場合、どのように区別が付くかというと、暖かい基地の中に待ち帰り、解凍した人間の糞が臭い匂いを漂わせたときに区別ができるらしい。自分はその話を聞いたとき「そんな馬鹿な！？」と思った。また、この事が分かったときの落胆やショックはかなりものだと思った。

これからも、自分は様々な糞を見ていくだろう。しかし、自然界で人間の糞だけはこれからも見たくないと思った。